

ジェンダーを超える踊り

—ナルタキ・ナタラージ

演者はパフォーマンスの場で、何を内在化し、体现するのか。男女の世界を往来し、超越する神々の世界の踊りのなかで、南インドの古典舞踊家が見出したのは自分自身であった。



チェンナイで公演するナルタキ・ナタラージ (2014年)

南インド・タミルナードウ州で形成されたバラタナティヤムは、インドを代表する古典舞踊ジャンルのひとつである。中心地であるチェンナイ(旧マドラス)市はもとより、インド各地で人気があるほか、国外の南アジア系コミュニティでも盛んに演じられている。この南インド古典舞踊界で今もつとも注目を集めているアーティストの一人が、ナルタキ・ナタラージである。伝統に根ざした踊りを忠実に伝える舞踊家として高く評価されている一方で、トランスジェンダーとして初めて成功を収めた古典舞踊家である点も注目されている。

混乱の日々と救い

ナルタキは、タミルナードウ州の古都マドウライに男性として生を受けた。小さいころから、自分が他の男の子たちと違うことに気がついていったという。女性という方が居心地よく、母親のサリーをまもって踊るのが好きだった。女の子のような行動を両親や親族から咎められ、自分の性について混乱する日々が続いた。

マドウライは、女神ミーナークシの寺院が

あることで有名である。境内にあった女神の石像にナルタキは目を奪われた。乳房が三つあったからだ。ミーナークシは幼いとき男の子のように振る舞っていたが、シヴァ神に恋したとき、第三の乳房が消え女神となったという話を祖母から聞き、自分の性と重ね合わせた。自分のような神さまがいることで救われた思いがした。

五歳になったころ、村の広場で一人遊んでいるナルタキに、そと近づいて肩を叩いたのがシャクティだった。シャクティの目を見て、自分と同じ境遇にいたことがすぐにわかったという。ナルタキは、そのとき初めて自分の踊りを披露した。シャクティは最初の観客だった。その後、二人はいつも行動をともにするようになる。映画で活躍していた舞踊家に憧れ、彼女たちの踊りを真似た。学校で踊りを披露し賞までもらったが、家人には隠さなければならなかった。

次第に、家族からの侮蔑や圧迫に耐えられなくなり、一二歳になるとシャクティと



ナルタキの盟友、シャクティ・バスカル

一緒に家を出た。路上演劇集団に入ったが、極貧生活を余儀なくされた。高位カーーストの裕福な家庭で育った二人には辛い日々だったが、シャクティはナルタキの才能を信じ、我慢して精進すればきっと立派な舞踊家になれると励まし続けた。

居場所としての舞踊

ナルタキの踊りは人気があったが、まったくの自己流だった。一八歳になったころ、小さいときから憧れていた舞踊家の師匠が雑誌で紹介されているのを見つけると、居ても立ってもいられず、翌日には彼の家の門を叩いた。粘り強く懇願し、一年後に師匠の家に住み込みで舞踊を習うことを許された。学び始めるやいなや、探していた自分の居場所や生きがいを見つけたと感じ、その後一五年間にわたって踊りを学ぶことだけに没頭した。師匠が住み込みを許したのは、ナルタキの資質を認めたからだだったが、それと同時にトランスジェンダーである二人を社会の無知や中傷から守るためでもあった。その恩を二人は決して忘れない。

ナルタキは、神の世界を表現する古典舞踊を通して、自分を発見したという。バラタナティヤムは、寺院における奉納舞踊を起源としている。ジェンダーを超越する絶対的存在との合一を願う人間の姿が、男女間の情感(献身、ロマンス、エロティシズム)に置き換えられて表現される。多様な性の在り方を内包する神々の世界を演じることは、ナ



民博の研究公演「時を超える南インドの踊り」で熱演するナルタキ (2015年)

タルタキにとって単なる比喩ではなく、自分の存在とわがちがたく繋がっている。

師匠が一九九九年に亡くなると、二人は意を決して舞踊の中心地チェンナイに移り住んだ。古典舞踊界の保守層からは中傷も受けたが、ナルタキの才能は徐々に評価されるようになった。数多くの賞を受賞し、毎年海外公演をおこなうほど活動の幅も広がった。ナルタキは、トランスジェンダーであることを前面に出して舞踊活動をしており、彼女の舞踊界での成功は、性の多様性に関する意識を高めるのに一役買っている。